

武蔵野日曜集会

一切の秘訣

――ピリピ書第4章――

1992年4月12日（武蔵野）

小池辰雄

十字架を負う 主にありて喜べ 包摂心 初めに本願あり 根源の現実 召団の大事な使命
一切の秘訣 馨しき香 キリストに在れば大丈夫

【ピリピ4】

1 この故に我が愛するところ慕うところの兄弟、われの喜悦^{よろこび}われの冠冕^{かんむり}たる愛する者よ、斯くのごとく主にありて堅く^{かた}立て。

2 我ユウオデヤに勧め^{すす}メントケに勧む、主にありて心を同じうせんことを。

3 また真実に我と軛^{くびき}を共にする者よ、なんじに求む。この二人の女を助けよ。彼らはクレメンス其のほか生命の書に名を録されたる我が同労者と同じく、福音のために我とともに勤め^{つと}めたり。

4 汝ら常に主にありて喜べ、我また言う、なんじら喜べ。5 凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ、主は近し。6 何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈をなし、願^{ねがい}をなし、感謝して汝らの求^{もとめ}を神に告げよ。7 さらば凡て人の思にすぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。

8 終^{おわり}に言わん、兄弟よ、凡そ真なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔きこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞^{よききこえ}あること、如何なる徳いかなる誉^{ほまれ}にても、汝等これを念え。9 なんじら我に学びしところ、受けしところ、聞きしところ、見し所を皆おこなえ、さらば平和の神なんじらと偕^{とも}に在^{いま}さん。

10 汝らが我を思ふ心の今また萌^{きざ}したるを、われ主にありて甚^{いた}く喜ぶ。汝らは固^{もと}より我を思いいたるなれど、機^{おり}を得ざりしなり。11 われ窮乏によりて之を言うにあらず、我は如何なる状^{さま}に居るとも、足ることを学びたればなり。12 我は卑賤^{いやしき}におる道を知り、富におる道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、乏^{とほ}しき事にも、一切の秘訣を得たり。13 我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。14 されど汝らが我が患難^{なやみ}に与^{あずか}りしは善き事なり。15 ピリピ人よ、汝らも知る、わが汝らに福音を伝うる始^{はじめ}、マケドニヤを離れ去るとき、授受^{やりとり}して我が事に与^{あずか}りしは、汝等のみにして、



他の教会には無かりき。¹⁶ 汝らは我がテサロニケに居りし時に、一度ならず二度までも我が窮乏^{ともしき}に物贈れり。¹⁷ これ贈物を求むるにあらず、唯なんじらの益となる実の繁^{しげ}からんことを求むるなり。¹⁸ 我には凡ての物そなわりて余りあり、既にエパフロデトより汝らの贈物を受けたれば、飽き足れり。これは香^{こうばし}しき香^{におい}にして神の享^うけ給うところ、喜びたもう所の供物^{そなえもの}なり。¹⁹ かくてわが神は己の富に随^{したが}い、キリスト・イエスによりて汝らの凡ての窮乏^{ともしき}を栄光のうちに補い給わん。²⁰ 願わくは栄光世々限りなく、我らの父なる神にあれ、アアメン。

²¹ 汝らキリスト・イエスに在りて聖徒おのおのに安否を問え、我と偕にある兄弟たち汝らに安否を問う。²² 凡ての聖徒、殊にカイザルの家のもの、汝らに安否を問う。

²³ 願わくは主イエス・キリストの恩恵^{めぐみ}、なんじらの霊と偕に在らんことを。

● 十字架を負う

今日でピリピ書が終わります。ピリピ書の第4章。

¹ この故に我が愛するところ慕うところの兄弟、われの喜^{よろこび}悦^{よろこ}われの冠冕^{かんむり}たる愛する者よ、斯^かくのごとく主にありて堅く立て。

「斯^かくのごとく」というのは、前に3章の終りで言ったことです。ピリピの教会はパウロが最初に建てたヨーロッパの教会です。ギリシア語ではピリポイといえます。「愛するところ」とか、「慕うところ」とか、パウロが非常に忘れることができない教会で、またよくいろいろパウロのために尽くしてくれたわけです。

² 我ユウオデヤに勧め^{すす}メントケに勧め^{すす}む、主にありて心を同じうせんことを。

³ また真実に我と軛^{くびき}を共にする者よ、なんじに求む。この二人の女を助けよ。

彼らはクレメンス其のほか生命の書に名を録^{しる}されたる我が同労者と同じく、福音のために我とともに勤めたり。

「この二人の女を助けよ。ユウオデヤとメントケをよく助けてやつてくれ」

と。多分、寡婦の方でしょうね。「軛^{くびき}を共にする」という言い方は、ちょっと妙な言い方ですが、二匹の牛が並んで首かせでもって進んでいく、その姿が軛を共にするという姿なんです。一緒に十字架を負う、という気持を持つているわけです。生命の書に名を録されたという素晴らしい言い方をしてありますが、これは黙示録にも出てきますけれども、本当にキリストのために十字架を負った人たち、これが「生命の書に名を録されたる」者です。「十字架を負う」という言い方は、随分極端な言葉ですけども、キリスト自身が

「己の十字架を負いて我に従え」

とおっしゃった。聖名のため、福音のために棄身でもって労することが、十字架を負うと



いうこと。やがてキリストは自ら十字架を負われたわけで、もう先の先までイエスは分か
つておられた。

●主にありて喜べ

⁴ 汝ら常に主にありて喜べ、我また言う、なんじら喜べ。⁵ 凡ての人に汝ら
の寛容を知らしめよ、主は近し。

「主は近し」という言い方は、非常にさし迫ったキリストの再臨を考えている。

「常に主にありて喜べ」

という。ピリピ書は「喜びの書翰」とも言われるので、獄中でもつて、いつ処刑されるか
分らない――処刑といたつて、なにも罪をおかしたわけではないけれども――そうい
う現実において、パウロは完全に喜んでいる。なぜ喜ぶかというところ、勝利をキリストから
いただいているからです。あらゆる患難に彼は勝ってきた。これは彼の体験からものを言
っている。彼がどんなに艱難に遭つてきたか、コリント後書の11章の終りの方につぶさに
書いてある。

「これはキリストの力で、聖霊の力で勝ったから、本当の意味で万歳だ」

と。「主に在りて」の「在りて」が大事なんだ。主の中で、「キリストの中で」喜ぶ。我々は、
信交の現実には「中」なんです、外ではない。外接ではなく、内接しているわけです。何が
来ても、もうキリストの中に入つてしまっているんですから、

「主に在りて喜べ」

です。「常に主にありて」という非常に強い言い方です。人間は、「主に在りて」は、なか
か普段では、ないかも知れない。けれども、我々は空気の中にある。空気から逃れられない。
こちら側がどうであろうと――自分の主観的な意識ではない――キリストが、

「お前を中に入れているぞ、包んでいるぞ、捕らえているぞ」

とおっしゃる。こちらは「うっかりしてました」と気が付く。それだけの話だ。

「うっかりしてました」

でいいんだ。「さあ、いけねえ」なんていつて自分で力む必要はない。

「申し訳ありません」

といつて平伏せよ、もう中にある。それが「幼児の心」という。何か、福音のことを非常
に難しくしてしまっているんだ。ちつとも難しくない。

「ああ、空気の中にいた。空気を吸っていた。空気のお陰で肉体は生きている。こ
っちはボヤボヤしてたけれども、キリストはいつも霊気でもつて、霊気を吸わせ
てくださっていた」

と。鼻から息をしているのは空気だけれども、魂が息をしているのは、この霊気の方だ。
ただ気が付くだけなんです。



●包摂心

⁵ 凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ、主は近し。

「寛容」という訳よりも「善意」です。

「汝らの善意を知らしめよ」

と。善意があっても、よく誤解される。けれども、善意は非常に大事です。カントの哲学でも

「善き意志(グーテル ヴイツレ)」というのが一番大事だ」ということを言っています。

「善意の心の者は迷っても、結局は行く所(善い方)に行くんだ」

と、これはゲーテの言葉です。善意のものは何かというと、良心なんです。良心がない人はいないわけだ。良心がなかったら、もう気違いだ。どうも、とかく良心が力を持たないんで、困るんですけれども。もうひとつ別な角度からいうと、一切を飲み込んでしまう、包摂心です。包んでしまう。

「凡ての人に汝らの包摂心を知らしめよ」

と。

「いろいろある。けれども、そんなものはいいいよ」

と、みな包んでしまう。これはキリストの、

「善き者にも悪しき者にも雨を降らせ、直き者にも直からぬ者にも陽を照らす」

という、あれが包摂の心です。包んでしまう。

「清濁合わせ呑む」

という言葉があるが、本当の意味で清濁合わせ飲んでしまう。そして、みなこれを清きものに化してしまう。キリストの包摂は、それを変化させる、「メタモルフォーゼ」させる力を持っている。聖書には非常に、善と悪、義と罪の対立の言葉もあります。けれども、最終の言葉は、あのキリストの言葉です。善き者にも悪しき者にも全部、恵みを与えているのに、それを受けとらない方が悪いんだから。

もうじき、キリストはやつていらしつる。

「主は近し」

という。

●初めに本願あり

⁶ 何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈をなし、願をなし、感謝して汝らの求を神に告げよ。

「思い煩うな」と、これもキリストの言葉です。山上の大告白の中にある。「…するな」とか、「…せよ」とか、いろいろあるけれども、それを律法のようにとつたらダメです。そしたら、



苦しくなる。

「思い煩うな」

とパウロが言ったら、

「思い煩いませんよ」

と答えてやればいい。

「そうですか、私はどうも思い煩って困ります」

なんて、そんなことを言う必要はない。

「思い煩いません、思い煩うのはやめました」

と。それは本当かどうか。思い煩うでしょうね、相対的な現実では。人間の心はいろいろの波をうつから。それをゴマかすわけじゃない。もう一つ奥の現実をもっていないといけない。その思い煩いの奥の現実には、思い煩わない現実を持っている。そのことに気が付くだけだ。

「ただ事ごとに祈をなし」

と、もちろん、祈りは大事だ。神・キリストとの交わりの世界だから。

「初めに言あり。^{ことば}言は神と共なりき」

という。あの「ロゴス」をゲートルは、

「初めに行為あり」

と訳した。「初めに言ではない、行為があつた」と。さすがはゲートルです。ところが、ゲートルよりも先にすごいのがいた。ベルナルという中世の神秘家です。

「我々の言葉の奥には行為がなくてはいかん。行為に裏付けられない言葉は空言で

ある。行為は言葉の基である」

と。凄いね。しかし、行為のまた基がある。その行為はどうして発するか。それが私の好きな言葉で、「本願」なんです。聖書では「御意」「神さまの心」というわけです。だから、ヨハネ伝の初めは、

「初めに本願あり」

と書いた方がいいんだ、本当は。

「初めに本願あり。本願は神と共にあり。本願は神なりき」

と。私は新約聖書を訳すときに、そういうように訳そうかな。

西郷南洲が嘆いている。今の政治家は本当に「敬天」の念があるか。天を相手にせよと。

「天を相手にしているか」

と。ところが、福音の世界にいくと、キリストが

「天は私だ。私がお前を相手にしているぞ」

と、上から来る。これが本願の世界です。こっちから天を相手にしているのではなくて、

「私がお前を相手にしているぞ」



と。キリストの力強い恵みの言葉です。あなた方一人一人は、キリストが

「お前を相手にしているぞ」

と。「いや、とてもいいけません」なんて言う必要はないんだ。

「ありがとうございます」

と、無条件だ。条件付きで相手にしていないんだ、キリストは。無条件に相手にしている。だから、相手にされると、力が来る。こつちから力む必要はない。頑張る必要はない。それが本願の力なんです。本願が相手にしてくださるから、それでひっぱり回されると、楽しくて、力がきてしまうがない。

「初めに本願あり」

と。だから、本願でひっぱり回される。本願は力をもっていますから。我々の側がどうだこうだは、そんなことはいい。気が付けばいい、キリストに。空気に気が付く。空気は、私たちはほとんど無意識で吸っている。眠っていても吸っている。

● 根源の現実

もう、人類は本当にその点で目覚めないと、21世紀は本当におかしくなる。植物がおかしくなったら動物も参る。動物も植物もまれば、人間は戦争でなくて、参ってしまう。原子爆弾なんて、あんなものをたくさん造ったものだから、大間違いだ。

動物でも植物でも人間でも、愛が最大の力なんです。愛だけが本当の力をもっている。

「いや、思い煩いません」

と私が言うのは、その角度からキリストをいただいていれば、

「思い煩うな」

「はい、ありがとうございます、大丈夫です」

と言える。本願の中での祈りだから、「祈りが足りない」とか、そんなことを考える必要はない。

「主さま！」

だけでいい、たくさんだ。キリストは、

「父よ！」

だけなんだ。私は「主さま」だけだ。後は言葉は要らない、何も。

「主さま！アーメン！ハレルヤ！」

だけ。

いろんな事を考える。考えの土台に、無私の世界に入る。すると、本当の考えがでてくる。「根源の現実」と私が言っているのは、そのことなんです。それから派生してくる。いくら考えてもいいですよ。「考えるな」なんて言っているんじゃない。考えたり、学んだり、何でもござれ。練習も。第3章ではパウロは、



「追求してやまず」

と言っているでしょ。「追求してやまない」のは、いわゆる努力精進ではない。

「原動力があるから、原動力をいただいているから、それでもって追求してやまず」

ということ。「これでいい」なんていう所は、地上ではありはしない。地上の生涯が終りに至るまで、追求してやまざるその姿が、既に神の栄光が現れつつある姿なんです。

●召団の大事な使命

7 さらば凡て人の思に^{おも}すぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。

素晴らしい言葉ですね。「キリスト・イエスによりて」ではない。

「キリスト・イエスにあつて」

です。「エン」(の中に)であつて、「ディア」(により)ではない。この場合、訳が間違っている。「心」は正に「ヘルツ」「ハート」です。「思」は「ゲダンケン」「ソーツ」。ギリシア語では「ノエーマ」という字です。正に「人の思いにすぐる」だよ。自分の思いにもすぐれている。

「人間の思いにもすぐる神の平安は汝らの心と思いとをキリスト・イエスにあつて

守るのである」

と。「守らん」ではない、「守るよ」です。ギリシア語は未来形を使つてあるけれども、いいんだ、そんなことは。「守るであらう」では困るんだ、「守る」だ。ただ、未来のことを言うから、ギリシア語というのはよく未来形を使うけれども。

信交の世界はいつも、未来を現実化する。過去を変貌させてしまう。過去の間違いも何も全部それが変貌して、救いの素材となる。

どうも、そういう無条件の世界に私は入ってしまったものだから、あなた方は聞きにくい何か知らんけれども。ウソじゃない、本当なんだ。この福音の他に、なんだかんだと、他の妙な現象にかかずらわったらダメです。もう、召団の使命を、召団に大事な使命があるのをどれだけ自覚しているか。お願い致しますよ。

8 終に言わん、兄弟よ、凡そ真なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しき

こと、凡そ潔きこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる徳い^{ほまれ}かなる^{おも}誉にても、汝等これを念え。

さすがは、パウロさんは、すっかりユダヤ的な所を抜けてしまった。ユダヤ教だったら、こんなことを言えない。

「何でもいいから正しい事は何でも思え」

と。非常に健全なる常識です。人間の直覚的な良心に訴え出る。「聞こえある事」まで書いてある。よき意味における「聞こえ」です。それをちゃんと心にとめろ、思えと。「思え」



という字は「ロギゼステー」で、「ロギゾマイ」という字からくる。

9 なんじら我に学びしところ、受けしところ、聞きしところ、見し所を皆おこなえ、さらば平和の神なんじらと偕に在さん。

「平安の神」です。パウロは本当の自信をもつて言っている。

「私が言ったことを、聞いたことを、みな行じてくれよ」

と。「行ずる」というのは、

「身証してくれ、身体でもって証してくれ」

ということ。単なる行いではない。

●一切の秘訣

10 汝らが我を思う心の今また萌したるを、われ主にありて甚く喜ぶ。汝らは固より我を思いいたるなれど、機を得ざりしなり。11 われ窮乏によりて之を言うにあらず、我は如何なる状に居るとも、足ることを学びたればなり。12 我は卑賤におる道を知り、富におる道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。

今日の主題の言葉「一切の秘訣」はこの12節から来ている。

「一切の秘訣を得たり」

という日本語の訳ですけれども、ギリシア語では「メモリーメマイ」という一つの動詞なんです。いろいろな事にちゃんと通曉しているという意味です。通じて明るいことです。よく通じていること、ちゃんと心得ていること。「秘訣を得たり」とはなかなかいい訳ですね。

「すべてにおいて、またすべての事々において通曉している」

と。ドイツ語でいうと、「アインゲバイツ」という字です。

「消息に明らかである、事情、秘密に通じている」

という意味です。

要するに、どのような情況においても、それに対処することができる。いわゆる「悟り」とまた違う。悟りは非常に静的です。「通曉している、秘訣を得たり」という方は、

「受動能動、自由自在だ」

ということ。大変なもんです、パウロさんは。これはキリストの力で、キリストの智慧で、キリストの愛で、聖霊の生命でそうなる。聖霊というのはそれだけの内容を持った、いわく言いがたきものです。だから、

13 我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。

と書いてある。凄いね。とにかく、パウロさんの現実は大変な現実です。

いつも、何かにぶつかつたならば、キリストの中に自分を投げ入れることだ。そうすると、御霊の光、智慧、力がやってくる。たとえばやりそこなつても、それで悲観しない。



「常に前進してやまず」

と、こういうわけだ。だから、

「我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり」

と。パウロは自分の力でしているのではない。

「強くしたもう力が私を通してなしたもう」

というわけだ。要するに、もう、分裂のない世界なんです。太陽の光が色んな花を咲かせているのと同じだ。これも光と水だ。

● 馨こうばし しき香

14 されど汝らが我が患難なやみ あずかに与りしは善き事なり。15 ピリピ人よ、汝らも知る、わが汝らに福音を伝うる始、マケドニヤを離れ去るとき、授受やりとりして我が事に与りしは、汝等のみにして、他の教会には無かりき。

それくらいあなた方とは親しい間柄だった、と。

16 汝らは我がテサロニケに居りし時に、一度ならず二度までも我が窮乏ともしきに物贈れり。

助けてくれたねえ、と。テサロニケ前後書というのが前にありますが、パウロが一番先に書いた手紙はこのテサロニケです。

17 これ贈物おくりものを求むるにあらず、唯なんじらの益となる実の繁しげからんことを求むるなり。18 我には凡ての物そなわりて余りあり、既にエパフロデトより汝らの贈物を受けたれば、飽き足れり。これは馨こうばししき香においにして神の享け給うところ、喜びたもう所の供物そなえものなり。

みんな神の愛でもってやってくれた、と。だから、自分は決して私心をもって何かもの言っているのではない、というわけです。

19 かくてわが神は己の富しちがに随したがい、キリスト・イエスによりて汝らの凡ての窮乏ともしきを栄光のうちに補い給わん。20 願わくは栄光世々限りなく、我らの父なる神にあれ、アアメン。

21 汝らキリスト・イエスに在りて聖徒おのおのに安否を問え、我と偕にある兄弟たち汝らに安否を問う。22 凡ての聖徒、殊にカイザルの家のもの、汝らに安否を問う。

23 願わくは主イエス・キリストの恩恵めぐみ、なんじらの霊と偕に在らんことを。「カイザルの家のもの汝らに安否を問う」

と、不思議なことが書いてある。ごく例外的な人でしょうね、これは。あの時のローマのカイザルは悪い奴だから。カイザルの家の者で、自分を囲ってくれている一部の人のことでしょう。



●キリストに在れば大丈夫

本当は、パウロはイスパニヤまで行きたかった。けれども、こういう手紙が残っていたということは、これが新約聖書になるなんてことは、彼は一つも思っていやしない。

「キリストに在つては、御霊に在つては、十字架・聖霊の事態に在つては、何がどうあつても大丈夫だ」

と。その根底の気持を失わないようにしてください。必ず、展開していきます。この真理は必ず勝ちます。単なる理ではないんだ。まことの現実です。

キリストがヨハネ伝の15章で、

「汝ら我に居らずば、何事をも為しあたわず」

という言葉がある。あれと照合します。

「私に居なければ、私と連なっていないければ、何もできない。けれども、私と連なっていないれば、何でもできるぞ」

と。「行き詰まらないぞ」ということです。パウロのここですべて言っていることと同じです。居るといふのは、その中に居ること。それと連なっている。ドイツ語の「ブライベン」、英語の「リメイン」です。

だから、本当は、これは単なる教訓おしえでなくて、「道」なんです。具体的に歩く道。要するに、「一切の秘訣はキリストにあり」

です。キリストに在れば、

「我に居れば、行き詰まりを知らん。つまず躓いても転ころんでもよくよするな。必ず前進させてやるよ」

と。私たちは、決して主義ではありません。あらゆるイズムを乗り越えている。一切の秘訣を得るところの現実には、イズムを乗り越えなければダメなんです。無教会主義なんてやっているうちはダメなんだ。大体、「無教会」からだなんていう言葉は歴史的には意味があるけれども、今は、意味をなさない。キリストの体としてのエクレシアというのは現としてあるんだから。いつまでも、無教会主義でやっているご連中は、気の毒になるね、私は正直。あれは墨守している。墨守しているとダメなんです。「内村鑑三先生」なんて、しょっちゅうやっている。先生を尊敬することは悪くはない。けれども、

「前進しろ」

と内村先生は天界から言っているんだ。

